

活動報告書（1）

報告者氏名：近藤 創、喜田 有紀

所属：香川県立善通寺養護学校

記録日：2014年2月14日

【対象児（群）の情報】

・学年

小学部 4年

・障害名

新生物疾患

・障害と困難の内容

病状上、本校に隣接する四国こどもとおとなの医療センターのクリーンルームに入院治療中のため、病室から外出する機会は限られている。

【活動目的】

・当初のねらい

病室から外出する機会が制限され、様々なことにあきらめている対象児に、「病室の外でしかできない、本当にしたいことをする」という体験をさせたいと考えた。

今まで、小学部集会や運動会、学習発表会などの様子を iPad のビデオ機能を使って見たり、校内生と一緒に授業を受けたりすることはしてきたが、対象児と話していくうちに本当に体験したい活動は、校舎内を移動したり、図書室で本を自分で選んだりするといった日常の学校生活だということが分かった。そこでテレビ電話を常時接続して校舎内を移動し、色々な学校生活を体験することをねらいにした。

・実施期間

毎週1回 45分間

・実施者

近藤創 喜田有紀

・実施者と対象児の関係

授業者 担任

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児の事前の状況

対象児は、病状上隣接する四国こどもとおとなの医療センターのクリーンルームで長期入院治療中であり、本校ベッド学級に在籍し当該学年の学習をしている。病状上病室から自由に外出することは制限されているため、様々なことに対して制限があり、無意識にあきらめている姿が見られていた。

・活動の具体的内容

3G回線を使用して、電波状態が悪くなくても回線が切断されにくい無料でテレビ電話をすることができるアプリ「TANGO」を使用した（本校や院内学級の電波状況が不安定だったため他のアプリは快適に使用することが出来なかったため）。病室の外の世界を体験できるように、テレビ電話を病室内で常時接

続し、病室にいながらにして休み時間の友達とのやり取りや移動、図書室での本選びなどを体験出来るようにした。

・対象児（群）の事後の変化

写真や名前でしか知らなかった、同学年の校内で学習する友達と仲良くなることができた。学校のスロープや体育館で先輩がしているバスケットなど、色々な場所や場面に興味をもつようになった。また、学校を探索するうちに迷子になることを楽しむ姿も見られた。図書室では、好きな本をいろいろと悩みながら自分で選んで借りることができた。

【報告者の気付きとエビデンス】

・主観的気付き

対象児はこれまで病室外の普通寺養護学校のことについては、集会や行事のビデオを見るといった、受身的な関わり方しかできなかった。今回、テレビ電話を通じて、自分の意思で見たいものを見て、話をしたい人と話すことができたのは大きな経験だったと考える。

・エビデンス（具体的数値など）

※実践に際してテレビ電話でつないだ場所

病棟から学校までの通路、校内の廊下及びスロープ、教室、体育館及び体育館倉庫、図書室、病院内売店、自宅

※テレビ電話を利用して経験したこと

同学年の児童との合同授業、小学部集会などの行事参加、校舎内の散歩、図書室での本選び

・その他エピソード（画像などを含めて）

対象児が希望を出して校内を探索していたとき、どこを移動しているか分からなくなり、迷子になることがあった。このことがとても印象的で、移動が制限される児童にとっては楽しい経験になったようだ。

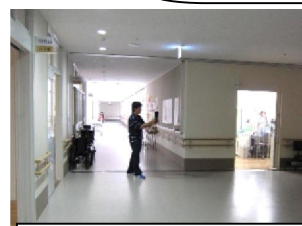
体育館では、先輩たちがバスケットボールをしているのを見付けることができた。本校に転校してきてから、校内に来たことがなく、特別支援学校のイメージをもっていなかった児童にとって元気に活動をする先輩の姿は希望として映ったようである。

図書室では、借りたい本について、背表紙を見比べて候補を挙げ、内容を立ち読みしながら確認して選んだ。解像度の問題から、細かい文字を確認することは難しいが、挿絵や表紙、本の雰囲気は十分確認することが出来た。実際読んだことのない作者の本を選んだのは、挿絵のイメージが良かったからとのことだった。

他にも、病院内の売店でお菓子を選んだときは、新製品の食べたことのないお菓子をとても悩みながら選び、とても楽しい時間を過ごすことができた。今後もテレビ電話による外出体験を継続し、さらに範囲を校外に拡大してもっともっと「したいことをできる」ようにしていきたい。



次はその角を右に！



教師が支持通りに移動



図書室での本選び



活動報告書（２）

報告者氏名：近藤創

所属：香川県立善通寺養護学校

記録日：2014年2月14日

【対象児（群）の情報】

・学年

高等部3年

・障害名

環軸椎亜脱臼、運動器疾患

・障害と困難の内容

カニューレを装着しているため発語が不明瞭である。平仮名で書かれた文を読み内容を理解することはできるが、漢字は苦手を書くこと読むこと共に難しい。指に変形があり、細かい操作を苦手としていて、辞書を使うことも難しい。

【活動目的】

・当初のねらい

高等部3年生ということで、社会に出ていくことを強く意識して実践を計画した。漢字を学習する上で、18歳の青年である本生徒に必要な能力は「漢字を読める能力」ではなく、「漢字で書かれた内容を理解できる能力」だと考えた。そこでiPad、iPhoneを利用して、生徒が自分の力で文の内容を理解できるように、また、漢字で書かれた文は自分では読めないものだという苦手意識を軽減できるようにしたいと考えた。

・実施期間

毎週1回 50分間

・実施者

近藤創

・実施者と対象児の関係

授業者

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児の指導前の状況

実態として平仮名は読めるものの漢字は小学校低学年のものでも読むことが難しい。また辞書を使って調べることも指先の変形があることと、辞書に漢字で書かれた内容を理解することから困難である。友達とのメールのやり取りや、ネットでの情報収集をすることを趣味としているが、メールではひらがなでのやり取り、ネットでの漢字は両親や教員、友達に読んでもらっている。

マンガや本を読むことは好んでいるが、漢字が出るたびに調べたり人に聞いたりすることは面倒だと思う傾向があり、ルビを振っているものを選んで読んでいた。

・活動の具体的内容

※メールやホームページ閲覧

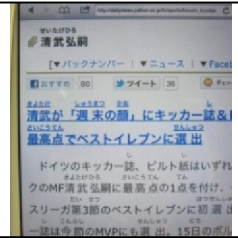
メールを利用する際、読めない漢字が出てきたときは、「設定→一般→アクセシビリティ→選択項目の読み

上げ」を設定利用して、音声で読み上げることにより内容を理解することができるようになった。

メールを使っのやり取りでは、今までは友達が本生徒のために平仮名でメール作成していたが、予測変換機能のある携帯電話を使用する友達には、平仮名入力は面倒な行為であった。漢字でメールをやり取りできるようになったことで、文字を入力する手間が簡略化されたために以前よりもやり取りが活発になった。

ホームページの閲覧では、漢字に自動的にルビを振ってくれる「ふりがなブラウザ」を利用することで、漢字を使用しているホームページも一人で自由に閲覧することができるようになった。

「ふりがなブラウザ」



ルビが自動で振られるので一人で楽しめる。

※プリントや本、看板などの漢字を読む場合

プリントや本などの紙媒体に書かれた漢字を読むためには、カメラで漢字を読み取って音声で読み上げることができる「Worldictionary」を利用している。文字を認識するためには数秒間保持する必要があるが、自作のスタンドを使うことで、ぶれずにスムーズに文字を認識できるようになった。読み取った漢字の候補が羅列されるので、誤変換が少なく、また正しく漢字を読み取っているか漢字の形を意識し、確認するという学習にもつながった。

「Worldictionary」



紙に書かれた漢字でも、カメラで認識して読み上げることができ、内容を理解することができる。

・対象児（群）の変化

文字を読むとき人に聞くことや読むこと自体をあきらめるということが減ってきた。また、新聞やお知らせプリントなど、今まで読めないと思って関心をもたなかったものにも挑戦する姿が様々な場面で見られるようになった

【報告者の気付きとエビデンス】

・主観的気付き

インターネットの閲覧では、自分一人の力で内容を理解できるサイトが増え、保護者や教員に読んでもらう機会が減った。また、メールでも同様に一人で確認できるようになったことは大きな喜びにつながった。

紙媒体の字に関しても、ゲーム感覚で調べようとする姿がみられ、今まで避けていた漢字に積極的に接していく姿が見られるようになった。興味のある新聞のテレビ欄の内容を調べることができるようになったのがすごくうれしいと教えてくれた。

・その他エピソード

携帯電話を使っのメールでは、漢字予測機能を使っているため、わざわざ平仮名で入力することは実は手間のかかる行為であった。漢字を使っメールのやり取りができるということは実は、対象児だけでなくメールをする相手にもメリットが大きいということが分かった。

実施前は宿題で、小学校低学年の漢字の読みの学習をしていたが、他のクラスメートと同じ新聞の記事を読む宿題を一人でこなすことができ、本人も保護者もとても喜んでた。漢字で書かれていても一人で内容を理解できるということが本人の自尊心を高め、プライバシーを守ることが分かった。また、家族や教師など周囲の大人も改めて高校生である本生徒に対する接し方を考え直す、よい機会になったと思う。